

銀山坑道の技術を利用したトンネル水路

ただにまぶ 只谷間府



斐伊川から取り入れられた農業用水は、土木学会選奨土木遺産認定の「来原岩樋」を抜け、水溜まり池から北側に出雲市街地をぬけて荒木浜へ流れていく高瀬川と、もう一つ西側へ流れていき塩冶の田畑を潤す間府川とに配水されます。

もともと塩冶地区は稲作には不向きな土地だったため、松江藩はこの土地の開発を検討し、斐伊川からの用水開削を命じました。これが間府川です。来原岩樋から600m水路をたどると、山を貫いた間府——高さ8尺、幅4尺、長さ¹⁾198間余(約360m)の水路トンネルがありました。

間府の工事は、正保(1644)～慶安(1652)のころに、松江藩が石見銀山の鉱夫を呼び寄せて掘り抜かせたそうです。天井や壁にはノミで削った跡が残っています。当時の掘削方法では、明かり採りと進行方向を見通すため、さらに後の砂の除去に利用するため、山の表面まで垂直に3本の穴を掘らせたものの、その当時は測量技術が未熟であったため、両方向からの貫通地点には水平方向1.5m、垂直方向1.2mのズレが生じています。

また、斐伊川からの取水口は来原岩樋より少し下流の汗入ヶ樋^{あせりがひ}だと言われています。その詳細は明らかにはされていませんが、元禄17年(1700)来原岩樋ができたことによって、今見る形で取水するように間府川も付け替えられたとも言われています。

こうした江戸時代の灌漑工事によって、塩冶地区は豊かな田園が広がるようになりました。350年にわたって塩冶地区を潤してきた只谷間府でしたが、斐伊川放水路の建設のために流れを一部変えて、間府はその役目を終えました。しかし、本来であれば見ることでできなかった只谷間府が放水路工事によって白日の下にその姿を現わしたことは、当時の掘削技術を知るうえで、大変有意義でありましたし、先人の技に敬意をはらうべき事柄でした。

1) 元の長さは230間(418m)だったが、その後崩落したため198間(360m)となり、斐伊川放水路の工事前調査では338mであった。



斐伊川神戸川分流水門

斐伊川放水路事業によって付け替えられ、只谷間府は350年の役目を終えた。

■位置図



来原岩樋出口の水溜り池
岩樋を通った水は水溜り池に入り、ここから高瀬川(右方向)と間府川(左水門方向)に分かれる。



水田を潤す間府川



只谷間府内部

只谷間府は、石見銀山から鉱夫を招き掘らせたと言われる。上半部は大半が素掘りであるが、下部はコンクリートで補修されていた。